赤江瀑

春喪祭

赤江瀑

春喪祭

徳間書店

春喪祭

昭和五十三年三月十日　第一刷

定価は帯・カバーに表示してあります

著者　赤江瀑

発行者　徳間康快

発行所　株式会社徳間書店

東京都港区新橋四の一〇
電話東京(433)六二三一番(代表)
振替　東京四―四四三九二番

(乱丁・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取り替えいたします)

印刷・長苗印刷(株)　製本・大口製本印刷(株)

©1978 Baku Akae Printed in Japan

春喪祭——目次

夜の藤十郎――五
春喪祭――四五
宦官の首飾り――七五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

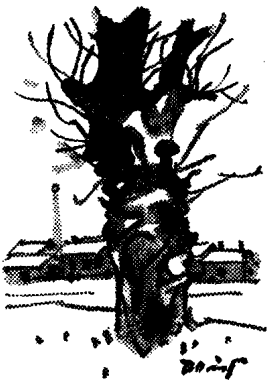
文久三年五月の手紙――一三九
百幻船――一七一
七夜の火――二一一

人　形　清　由理亜＋我妻　將吉

人形撮影　吉池　一輝

装　幀　井上　正篤

夜の藤十郎



受験

はじめて見る雪山だった。
そして、はじめて見る雪の原だった。
「これが、みちのくか……」
角目伸太郎は窓ガラスに頬を寄せて、ゆっくりと流れ去る雪景色をながめていた。
汽車はぜえぜえと苦しそうに喘ぎながら、緩やかな勾配をさきほどから行きつ戻りつしている。
客車の前と後ろに機関車がついていて、進んだり、後退したりのくり返しが続いているので、いったいどっちに向かって走っているのか見当がつかない。
夜はようやく明けはなれてきた。さっきまで窓の外の闇の中を白く走っていたのが雪であろうとは想像していたが、こんなにも雄大な、どっしりとした重量感のある雪の祭典が展開されてい

「おや、やろうってのかい。馬の骨。ここをどこだと思ってるんだい」
「神田川の南岸、柳原の土手どすねやろ」
「そうかェ、そうかェ。いい度胸だ。モグリにしちゃあ、立派だよ。どうやら、その科、その口振りゃあ、上方もんらしいけど、ぞべぞべとまあしやがって、流れ地獄がふらりとさァ、流れてきておいそれと、稼ぎにしようたって、そうは問屋がおろさないんだ。お江戸は、それほど甘かねえよ」
「甘いか辛いかしらんけど、あたしゃ、モグリやあらへんえ。筋違橋から浅草橋まで、柳原の土手筋は、両国土手のおかんさんがとり仕切ってなさると聞いてるけど、あんた、ちがうてゆうてはんのか。あたしゃ、顔もとおしていてあるし、みかじめ料も、ちゃんと払うてきてあるのえ」
黒の袷に、白手拭の吹き流し、おさだまりのゴザかかえて、素足にちびた日和下駄つっかけているその夜鷹は、ちょっとひるんだ顔つきになり、それでも意地の悪げな眼で、わたしを睨み返しました。
わたしかて、負けてはおりません。
こんな女の百や二百、どうかかってこらりょうと、もうびくつきもうろたえもするもんじゃあらしまへん。自慢にもなんにもなるようなことではござりませんけども、そんなウブゆうてる時期は、もうとっくに、どこぞへ捨ててきました。
泥水吸うたからだでおす。
「あんたはんこそ、モグリとちがうか」
わたしは、自堕落に鼻で笑うてやりました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「なにィ」

と、その夜鷹は、白粉はげた二の腕まであらわにさらし、わたしのゴザを引っつかむと、横ざまに振りまわし、

「この姥桜」

と、毒づきました。

姥桜にちがいはございませんなんだ。長年肌にしみついた花追う稼業の身の癖で、若うに見せる手ぎわこそ誰にも負けはしませんなんだが、都落ちしてからでも五年、もう四十路もなかばはとうに越しておりました。

姥桜とゆわりょうと、婆、花車方と笑わりょうと、そんなことで癇立ちなど決していたしはしませんなんだが、かなしいのは身の性どす。

夜鷹が踏みつけにしておりましたわたしのかぶりものの手拭。それが眼に入ったのでございます。

夜鷹稼業は、石持小袖。ゴザに下駄ばき。お頭に木綿の手拭の一枚の吹き流し。これが相場でございます。どうせ、地獄のどぶ水稼業。足で踏まれて、泥土にまみれたところで五十歩、百歩。と、まあお笑いかもしれしませんが、粗末な木綿手拭でも、洗いさらしたその一枚、頭にかぶってこそ、わたしは夜鷹。役者でゆうたら、これは舞台衣裳どす。振られた役のお衣裳なら、生きるも死ぬるも、この衣裳に、精魂こめもいたしますし、身を張りもいたします。生命の花を賭けたものどす。

いったんもろうたお役の衣裳に、役者が生命張りますのは、あたりまえのことどすねや。それ

を足蹴に踏みにじられたら、役者は生きてゆけしまへん。
役者やなんて、どの顔さげてとおっしゃってではございましょうが、昔とった杵柄はつい影振りに振りおろして、あとでむなしゅうなるのどす。
この日も、そうでございました。
気がついたら、わたしはもう、夜鷹をつきとばしておりました。赤い蹴出しが闇間におどって、夜鷹は一度柳の木の根に横転し、けものじみた咽声放ち、つかみかかってまいりました。組んずほぐれつのとっ組み合いが、やがてはじまったのでございます。
浅草橋から十町ばかり、途中新らし橋、和泉橋、そして筋違橋までつづくこの柳原の堤道は、闇がおりると、ただ一筋、夜鷹の群れつどう安化粧の脂粉の香が、夏なら明け方近うまで絶えない私娼窟と変るのどす。
品川、板橋、千住と住み処を移り歩いて、本所は南の川っぷち、堅川ぞいの花町へ出るようになったのが一昨年の春。この両国の柳原へ河岸を変えましてから半年目。本所の花町も柳原の堤道も、いずれもお江戸では名高い夜鷹のたむろ地でございました。
〈この世の名残り、夜も名残り、死にに行く身を譬うればあだしが原の道の霜、一足ずつに消えて行く……
近松門左衛門さまが浪花の竹本座で、大当りとられた浄瑠璃ものの心中節が、耳にも聴こえ、口にものぼり、ふと気がつくと独りすさびに唄っていてるこのような毎日でございました。
この世の名残り、夜も名残りと、京を離れた一日が、思えばこの身の花の絶えた日。いえ、絶えやせん。終りやない。散りぎわの花、ぱあっと咲かせに行くのやと、いっしんに心で思うて下

ってきたお江戸でおした。死にに行く身や。花がある。一生、末代消えぬ花、心中花を咲かせに行くねや。

それぱっかりが心の頼り、命の綱と、思えばおそれ気もう捨ててきた京どした。生まれてこのかた京大阪を離れたことのないこの身には、けれどもやっぱり、見知らぬお江戸はあだしが原。一足ごとに踏む霜の、消えてむなしうなる音が、鬼や蛇の息聴くようで、身を切る氷のするどい刃。心もとのう、空おそろしう、淋しう身を突く針の霜。

このお江戸には、頼って頼れぬこともない知り合い、縁故もないわけではござりませなんだ。木挽町、山村長太夫座。森田勘弥座。また堺町には、中村勘三郎座。市村竹之丞座。

当時お江戸狂言の檜舞台を張ってはるどの大立者、権勢役者でも、わたしの名を知らぬとゆわはるおかたは、おそらくおってではござりますまい。

身はおちぶれたとはいえ、わたしにもまだそのくらいの自負はおした。名前もあると思うてます。

江戸狂言を二分する、右と左の惣芸頭。その勢力なら今をときめくお江戸の看板の、市川団十郎と中村七三郎。どちらも、京へのぼられた折、わたしとは昵懇の顔見知りの間柄。酒席もともにいたしましたし、隣り合うた小屋同志で、はばかりながら幟り看板賭けての舞台の鍔迫り合い、真剣勝負も競い合った仲でござります。

狂言の筋目、由緒をゆうならば、京都四条河原はこの国の、いわば芝居の本舞台。大根を束ねる狂言の地でござりましょう。その都に君臨する選り抜きの京四座、ゆうたら天下の本舞台で、花の元禄隆盛の狂言まっさかりの時期を、わたしは立女形をつとめて生きてきた人間でござります。

市川団十郎さまにしても、中村七三郎さまにしても、役者の位取りからいうたら、その当時、

京を席巻なされていた大座本、わたしの親方さまでもあり、また相手役でもある坂田藤十郎さまには、歯がたちはいたしませなんだ。

こう申したら、身もとは知れて、この身の恥を後世に残すことにもなりますけれど、それは都を捨てた日に、覚悟をきめてかぶった恥。いえ、恥、辱しめなどとは、決して思いはいたしませなんだ。

捨てた都も、離れた舞台も、わたしにとってはこの身の生命貫く道。

坂田藤十郎あるならば、そのそばにこの若女形ありと、人にもゆわれ、世にも知られ、物の記録や評判記にも書き残されて、藤十郎さま出世狂言の折からずっとおそばをつとめさせてもろうてきたわたしには、この道だけが、この東下りの道だけが、たとえ人はどう思おうと、挙げた名を挙げとおす、たてた名をたてとおす、自分にとってはたった一つの一本道だと信じたからでございます。

舞台をしりぞきましてからは、ご法度の剃った月代ももとになおし、誰はばかることもなく自髪で頭も結えましたし、姿形になにひけ目なく、女暮らしにとびこめました。もとより女を生きてきた身、天下の役者色評判も上上吉と囃されて、世の好色の血も騒がせ、名だたる役者・百花名華の筆頭に顔つらねてきた身ィでおす。巷にもぐって、女暮らしをはじめることなど、造作もないことでおした。

その点、江戸は京都とちごうて、役者のなかには顔見知りはございましたが、わたしの舞台を眼にした客は身のまわりにはおりませぬ。名前や役者絵の絵姿などは、風のたよりにとどいてはおりはいたしはしましたろうけど、まわりに気をかねることもなく、なにさま広いお江戸のこと、

京へ上ったことのある役者衆にさえ見つからなければ、身もとのばれる気づかいなどないも同然でござりました。

いえ、わたしは何度か、木挽町へも堺町にも、芝居見に出かけておりました。もうやめよう、金輪際これっきりやと、そのたびごとに眼ェつぶって、狂言の水思い切ろうと、未練毒づきはするものの、江戸に下った当初にはやめられなんだこともおした。

もしやして誰ぞ知った顔にでもと、思えば足も居すくむような心地でござりましたけど、ここは江戸や、京やないとわが心にゆい聞かせ、櫓太鼓や笛三味線、声色使う木戸芸者の呼び込みの音におのれを忘れ、つい千尋の谷ずるずる引っぱり込まれるような、誘われ心も持ったものどす。

しかしもう、今は、そんなことも、みんな遠い。遠うおす。遠いことが、ゆうたらわたしの一世一代、つとめきってのけてみせにゃならんつとめでおすのやさかい。

京は都万太夫座、坂田藤十郎さま座本の大舞台を立女形で張ったこのわたしが、終生に一度得たこれは大役でおすのやさかい。わたしも役者で名を挙げたからには、このお役だけはおりるわけにはまいりませぬ。

なんとしてでも、つとめ果たしてやり遂げねば。

粗末な石持小袖に、木綿の白手拭一枚頭へ吹き流し、筵ゴザ抱えて、素足に日和下駄。

これが、わたしの一世一代、役者の名を貫きとおせる晴れの舞台の衣裳どす。

闇夜が、舞台の花道どす。

この五年間、闇夜の歳月、つとめつづけてきていまだに果たしおおせずにいてる、また、いつ果たせるとも知れぬ、ゆうたら闇のお役でおした。

横大工町の裏長屋を出るとき自分で切る切り火が、今では心の頼みの綱。日ごと夜ごとの引き幕あける、ゆうたら柝の頭どす。幕があいたら、ここが先途、役者は出て行かなりまへん。

柳原の高土手道は、見とおしても見とおしきれぬ長い闇夜の、一筋道でござりました。

わたしと夜鷹は、堤の斜面をごろごろ転がりおりながら、引っつかみあったまま、おたがいにわめきちらしておりました。

咽とげとげしい荒んだ声が、自分のものとも思えぬのが、もうかなしうもなく、苦しうもなく、夜ごと肌に馴じみついた狂態なのでござりました。

「やめんかい。あんたら、まあ」

と、男の声が割って入ってきましたのは、そんなときでおしたのどす。

太い濁ったひびきのある世馴れた声でござりました。

男はどうやら、堤の下道に出ていてた夜そば売りの屋台で立食いの最中ででもあったらしく、わたしどもを引きわけますと、

「え、夜鷹同志がつつき合うて、共食いしとったら、おまえ、客の食うとこ、のうなるやないかい。ええかげんにせんかい、別嬪はんたちよ」

と、こともなげに、手の泥ぽんぽんとはたいてから、またのっそりと、紙行燈を軒につるしたそばの荷へ帰って行き、屋台へ首をつっ込んで残りの鉢をすすりにかかりました。

「このド地獄」

と、夜鷹は一声悪態残して、筋違橋のほうへ場所変えし、わたしは、手拭とゴザを拾いあげる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com